

博物館

No.
104
Museum News

ニュース



唐松に麒麟図

唐松の枝がのびる溪流のそばに、空想上の動物である麒麟がたたずむ絵です。2枚の画面に写し取られ、緑色のみがほどこされています。徳島藩の狩野派の絵師である矢野家に伝わりました。

矢野家は、絵手本や模写のリストである『絵本目録覚』を残しています。そのなかの「衝立杉戸」のところに、「唐松二麒麟 三間二枚立テ 惟信」とあります。もとの絵は、師にあたる狩野養川院惟信がえがいた杉戸絵です。秋の企画展『徳島藩絵師のすがお-伝えられた絵手本や写しから-』（10月22日～11月20日）で展示します。

（美術工芸担当：大橋俊雄）

中世の四国辺路と宿^{しゆく}

—四国八十八か所の前史をめぐる仮説—

長谷川 賢二

四国遍路は、弘法大師空海ゆかりとされる札所八十八か所をたどる巡礼として有名です。しかし、成立過程には少なからぬ謎があります。その一つが、札所^{しやくんばい}を巡拝する仕組みがなぜ現れたのかということです。四国遍路に先行して12世紀に成立していた西国三十三所巡礼がモデルでしょうが、四国遍路の前身である中世の四国辺路の修行にも源流があったと考えることができます。以下ではこのことについて、述べてみます。

山伏による四国辺路の修行

八十八か所巡礼として四国遍路が確立したのは江戸時代です。遍路という表記もまたこの時代に現れます（ただし、徧^{へん}礼や辺路といった表記もありました）。その前提には、平安時代における聖による四国辺地という過酷な海岸巡りの修行、中世の山伏による四国辺路の修行がありました。

さて、中世の四国辺路に関する史料には、京都市の醍醐寺文書のうちの「仏名院所司自安案」、神奈川県愛川町の八菅神社の碑伝（山伏が入峰修行の証としてたてる標柱）の銘があり、ともに13世紀のもので、これらにより、四国辺路は、近畿地方の大峰・葛城山系や熊野での山岳修行とともに行われており、山伏の修行体系に組み込まれていたことが分かります。また、前者によれば、西国三十三所巡礼とセットになっています。

四国辺路の実態については、「路」という文字が示すように、修行の経路や作法が定まっていたとみてよいでしょう。また、神山町勤善寺所蔵の14世紀の大般若経に「海岸大辺路」とあることから、平安時代以来の海岸巡りの修行が継続していたとみられます。

札所の原形としての宿

山伏による四国辺路が山岳修行と並列的なもので、経路や作法が定まったものであったと考えると、巡り方について考えてみる必要があります。

ここで、大峰・葛城山系をはじめとする、山伏の行場となっていた各地の霊山に見られた「宿」という場に注目してみます。宿とは、山中における仏神の居所、行場としての峰、滝、川、洞窟などのことで、寺社が整備されている場合もありました。修行ルート^{いんぎょ}の固定化の中で定着した、いわば通過ポイントです。



図1 四国を巡る僧についての説話（考訂今昔物語 和朝部〔当館蔵〕より）

平安時代の説話集『今昔物語』を簡略にまとめた江戸時代の史料。四国辺地を巡る僧（聖）の話をもとにした「人をもって馬と為る語」が掲載されています。



図2 太龍寺の参詣道「かも道」（阿南市提供）

丁石が残る南北朝時代の道。この頃には多くの参詣者があったことを物語りますが、札所巡礼としての四国遍路は未成立と考えられます。

これを踏まえると、四国辺路においても、長い行程の中で、一定の区切りとして、また修行場として、宿が設定されていたと想定できます。海岸巡りの修行ゆえ、宿の位置は、四国外周の海岸部及びそれに近い内陸と考えられます。当時著名であった、焼山寺や鶴林寺、太龍寺などといった、後に札所となる霊場が含まれていた可能性もあります。このような宿こそが札所の原形であり、宿を経ながら移動する修行形態が札所巡拝のもとになっていると考えるのは自然なことといえるでしょう。

辺路の再編から八十八か所へ

戦国末期、四国辺路は山伏の修行から、俗人も含む旅へと転換しつつありました。海岸巡りがそのまま継続したとは考えにくく、それに準拠しつつも、安全性の高い内陸寄りの経路を含む巡礼へと再編されていくのでしょうか。

これに伴って札所が配置されるようになったとみられます。16世紀後半の愛媛県松山市の石手寺刻板に、薬師堂を「札所本堂」とする記載があることから、この頃、札所が現れつつあったといえます。一方、17世紀初頭、徳島藩祖・蜂須賀家政が阿波国内の主要街道沿いに設定した駅路寺は、「辺路之輩」の保護を目的の一つとしており、街道が辺路の通行路になっていたことが分かります。また、後の札所や遍路道と対応しない立地の寺院を含んでいました。したがって、経路や札所が変動しながら、最終的に八十八か所巡礼としての四国遍路に至ると考えられます。

以上、中世における山伏の修行の特質に注目して、四国遍路における札所巡拝という形態の源流と再編の流れを推論してみました。この考え方の当否は、今後の研究のなかで明らかになっていくことと思います。
(歴史担当)



図3 中世の山伏(七十一番職人歌合[当館蔵]より)



図4 江戸時代の遍路の姿(四国徧礼道指南増補大成[当館蔵]より)

企画展

徳島藩絵師のすがお

—伝えられた絵手本や写しから—

江戸時代の徳島では、複数の絵師の流派が藩のもとに依拠して活動しました。そのなかで狩野派は、17世紀末から19世紀後半までの長いあいだ、いくつかの家によって画法が受けつがれました。しかしくわしい実態は、のこされた作品や記録が少ないためあまり明らかではありません。

当館は、狩野派の藩絵師である佐々木、矢野、森崎の3家に伝えられた、絵手本や古画の写しなどを所蔵しています。これらは絵師が作品をえがくときによりどころにしたもので、かつては粉本と呼ばれていました。

この企画展では、館蔵の粉本をおもに展示し、それぞれの家の消長と、絵師ひとりひとりの足あとをたどります。徳島の画壇の知られざる一面にふれていただければと思います。

会期 平成28年 **10月22日(土)~11月20日(日)** 月曜日休館

会場 **博物館1階 企画展示室**

観覧料 一般200円、高校・大学生100円、小・中学生50円

○20名以上の団体は2割引 ○土・日曜日、祝日の小中高生および学校教育での利用は無料

○障がい者とその介助者1名は無料(身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の提示が必要)

○65歳以上は100円(割引の適用には証明書等の提示が必要)

主催 徳島県立博物館

<記念講演会>

- ◆演題 「絵手本が語る江戸時代の絵師の実像」
- ◆演者 四国大学文学部准教授 須藤茂樹氏
- ◆日時 11月6日(日)
13:30 ~ 15:00
- ◆場所 文化の森多目的活動室(入場無料)

<展示解説>

- ◆日時 ①10月23日(日) ②10月30日(日)
③11月20日(日)
いずれも14:00 ~ 15:00
- ◆場所 企画展示室(観覧料が必要)
- ◆講師 博物館学芸員

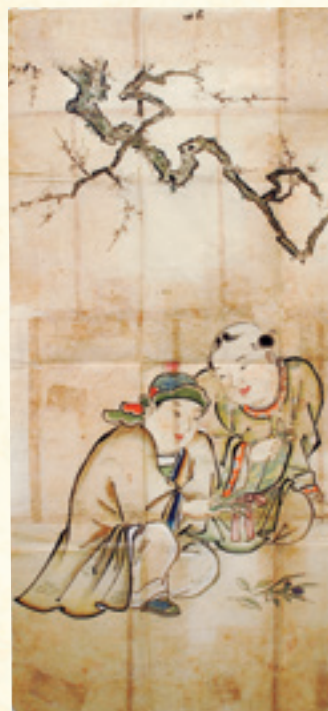
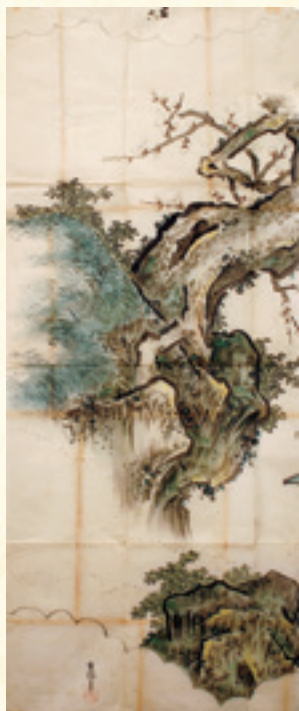


図 唐子遊図(部分)

狩野古信のえがいた屏風絵の写し。ほかの写しとの比較から、矢野南竹常博(?-1756)が作成したとみられます。

身の回りの植物を調べよう!

博物館への出勤途中で見慣れない草を見つけました。とても小さな草で、大きさは5cmほど。葉っぱの大きさは5mmもないほどです。毎日前を通る度に、遠目に見て「何だろう?」と思っていたのですが、朝のせわしい時間ということもあり、そのままにして時間が過ぎていました。そうこうする内、“中級クラス植物観察会”という普及行事の日になりました。



図1 道ばたで見つけたアワゴケ

この行事は、一年を通して、博物館のある文化の森総合公園周辺で植物の調査を行い、名前の調べ方や、標本の作成・整理の方法などを学んでいただくもので、最終的には、文化の森周辺の植物相リストの作成を目指しています。

ちょうどよい機会なので、この草を教材にして植物の名前の調べ方などを学んでいただくことにしました。具体的には、熱心な参加者のお一人、小川英則さんに詳しく調べていただくことになりました。そこで改めて皆で足元を見ながら歩いてみると、この植物は博物館の前から公園内の文書館にかけての路傍にかなりの量が生えていることがわかりましたので、サンプルを採って帰ることにしました。数日後、小川さんから電子メールが届きました。この草について詳しく調べてくださったのです。それによると、「この草は、アワゴケであり、オオバコ科の1年草で、関東地方以西の日当たりの悪いやや湿ったところに生える。茎は長さ1～6cmで、よく分枝して地を這い、全草無毛。葉は対生して、長さ2～6mmの倒卵形または

卵円形で全縁。1mm前後の葉柄がある。果実は先端がへこんだ、長さ1～2mmの軍配形ぐんぱいがたで無柄。ふちはやや翼状に薄くなる。似たものに外来種のアメリカアワゴケがあるが、葉幅約1mmと小型で、果柄があることと(0.5～1mm)、果実の稜は翼状にならないなどの点で区別できる」と書かれていました。

なるほど、確かにこの植物と特徴がぴったりです。類似種との違いも明らかになりました。私たちの身の回りには、本当にたくさんの種類の植物が生えています。しかし、特に興味を持って見なければ、その存在に気付くことはありません。是非多くの方々に博物館での行事に参加いただき、身近な植物についての知識を持っていただければと思っています。

(植物担当：茨木 靖)



図2 アワゴケの拡大写真。中央の茶色い物が果実。ふちはやや翼状に薄くなるのがわかる(小川英則さん撮影)



図3 葉。しゃもじ型の柄の部分の葉柄で1mm程度の長さがある(小川英則さん撮影)

学校教育とつながる博物館 ～教員のための博物館の日～

「とてもよい研修会でした。もっと早く参加しておけばよかった。」「今年は社会科コースに参加したので、来年は理科コースに参加します。」

この言葉は、ある催し物を終えての参加者の声です。その参加者とは「学校の先生」です。徳島県立博物館では、年に一度、学校の先生を対象に「教員のための博物館の日 in 徳島」を開催しています。博物館を学校教育に役立ててほしいという願いから始まり、今年で4回目となります。

学校が夏休みに入った7月27日、19名の先生方が当館に集まりました。先生方の校種は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校と広範囲にわたっています。隣接する鳥居龍蔵記念博物館の学芸員を含め、16名の学芸員が先生方と一日交流する時間をもちました。

「授業に役立つ博物館の使い方」を7つ紹介した後、次の活動を行いました。まず、常設展示室の解説です。理科コース（徳島の自然）（図1）と社会科コース（徳島の歴史）（図2）に分かれ、各学芸員が担当展示物をそれぞれ解説しました。先生方は、中世の板碑や徳島城と歴代藩主の話な

ど、展示物に秘められた出来事をうなずきながら、またメモを取りながら興味深く聞き入っていました。

次に、「博物館の裏側」の見学ツアーです。歴史民俗収蔵庫（図3）や生物収蔵庫など、普段は見るできない部屋を1階から4階まで案内しました。

最後に、当館が学校に貸し出している資料を紹介しました。先生方は、10のブースから思い思いに興味のある資料、例えば、白亜紀化石や復元青銅器、いろいろな種子（図4）などに実際に触れながら担当学芸員から説明を聞いたり質問したりしました。

研修会を終え、冒頭のような言葉を掛けていただき、先生方が徳島の歴史や自然のすばらしさをより感じてくれた1日になったのではないかと思います。

来年度も、たくさんの学校の先生が、この催し物（研修会）に参加し、学校教育と博物館がより一層つながっていくことを願っています。

（企画担当：真鍋憲人）



図1 常設展示室でナウマンゾウの解説



図2 常設展示室で中世の石造物「板碑」の解説



図3 歴史民俗収蔵庫で火縄銃に触れる



図4 学校用貸し出し資料「いろいろな種子」



なぜ埴輪は古墳の上に飾られるようになったのですか？

埴輪は、主に3世紀後半から6世紀に、古墳（土や石を盛って作られた、小山のような形のお墓）の上に飾られた焼き物です。筒型のもの（円筒埴輪）、人や動物、家などを表したもの（形象埴輪）などがあります（図1）。徳島県立博物館の常設展示室でも、小松島市前山遺跡の埴輪を常時展示していますので、ご覧になったことがある方も多いかもかもしれません（図2）。

さて、この埴輪、いったいなぜ、古墳の上に飾られるようになったのでしょうか。

養老4年（720）に成立した歴史書『日本書紀』には、以下のような内容の文章があります。

垂仁天皇の時代、皇族の死後、陵墓の周りに群臣を埋める殉死の制度に心を痛めた天皇が、皇后日葉酢媛が亡くなった際に、群臣に策を尋ねた。すると、野見宿禰が、土部（朝廷に土器などを献上した部民）に命じ、粘土で人や馬などを作らせて献上した。これを名付けて埴輪あるいは立物といい、以後天皇は家臣のかわりに埴輪を用いて殉死をやめることとした。

しかし、最初に作られた埴輪は円筒埴輪で、人物埴輪が現れるのは、古墳が作られるようになってから200年もたった、5世紀中頃のことです。

したがって、この日本書紀のエピソードは、野見宿禰をたてるために創られたものだといわれています。

現在の研究によると、埴輪のルーツは、弥生時代の終わり頃の吉備地域（現在の岡山県）の墳墓に飾られた、お供え用の壺（特殊壺）とそれをのせる土製の台（特殊器台）のセットだといわれています。吉備の特殊壺と特殊器台が古墳を飾る土器として採用され、形が簡略化されることによって円筒埴輪や朝顔形埴輪（図2右端）が創出されたと考えられています。

（考古担当：岡本治代）



図2 県立博物館の小松島市前山遺跡の埴輪（6世紀）



図1 大阪府高槻市今城塚古墳（6世紀前半）の復元された埴輪群

いろいろな形の
埴輪があるんだね



シリーズ名	行 事 名	実施日	実施時間	申込	対 象(定員)	備 考
歴 史 散 歩	つるぎ町貞光を歩こう	11月27日(日)	13:30~16:00	要	小学生から一般(20)	現地集合
	眉山周辺寺社めぐり	12月 4日(日)	10:00~12:00	要	小学生から一般(20)	現地集合
野外自然かんさつ	ざくろ石をさがそう！ [四国中央市]	10月 2日(日)	13:00~15:00	要	小学生から一般(25)	現地集合
	初めての植物かんさつ(秋編)	10月 2日(日)	13:30~15:30	不要	小学生から一般(15)	
	白亜紀の地層見学 [徳島県勝浦町]	11月 6日(日)	12:00~16:00	要	小学生から一般(25)	現地集合
みどりを楽しもう ・ 味わおう	ドングリクッキーを作ろう	10月16日(日)	13:00~16:00	要	小学生から一般(30)	
	パイナップルで年賀状を作ろう①繊維作り(②とセット)	11月13日(日)	13:00~16:00	要	小学生から一般(20)	
	リースを作ろう	12月 4日(日)	13:00~16:00	要	小学生から一般(30)	
	パイナップルで年賀状を作ろう②紙漉(①とセット)	12月11日(日)	13:00~16:00	要	小学生から一般(20)	
企 画 展・ 特 別 陳 列 関 連 行 事	企画展「徳島藩絵師のすがお」展示解説	10月23日(日)	14:00~15:00	不要	—	観覧料必要
	企画展「徳島藩絵師のすがお」展示解説	10月30日(日)	14:00~15:00	不要	—	観覧料必要
	記念講演会「絵手本が語る江戸時代の絵師の実像」	11月 6日(日)	13:30~15:00	不要	150	講師 須藤茂樹氏 (四国大学准教授)
	企画展「徳島藩絵師のすがお」展示解説	11月20日(日)	14:00~15:00	不要	—	観覧料必要
	特別陳列「古代の彩り 徳島の朱」展示解説	12月 4日(日)	14:00~15:00	不要	—	
	特別陳列「古代の彩り 徳島の朱」展示解説	12月25日(日)	14:00~15:00	不要	—	
部 門 展 示 関 連 行 事	部門展示「絵図と考古資料からみる城下町徳島」展示解説	11月12日(土)	14:00~14:30	不要	—	観覧料必要
	部門展示「絵図と考古資料からみる城下町徳島」展示解説	12月11日(日)	14:00~14:30	不要	—	観覧料必要
博物館スペシャル	文化の森大秋祭り!!	11月3日(木祝)	9:30~16:00	不要	—	祝日無料

◎小学生が参加する場合は、保護者同伴です。
◎全ての行事が「文化の森教室」に該当します。

普及行事のお申し込みについて

- ◎ 1枚の往復はがきで、1行事のみ申し込むことができます。
- ◎ 行事日の1ヵ月前から10日前までに、必着で右記までお申し込みください。
- ◎ 返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入してください。
- ◎ 希望者が多数の場合は抽選とし、詳細は当選された方にお知らせします。
- ◎ 原則として、参加費は無料です。

※お問い合わせは、徳島県立博物館へ(電話 088-668-3636)

——— 往復はがきの記入例 ———

< 往信の表面 >	< 返信の裏面 >	< 返信の表面 >	< 往信の裏面 >
52 〒770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館	何も書かないで ください	52 〒□□□□□□ 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1.参加希望の 行事名 2.参加希望者 全員名(学年) 3.住所 4.電話番号

博物館友の会に入会しませんか！

博物館友の会は、様々な活動を通して自然や文化に親しむとともに、会員相互の交流を図っています。2016年度も楽しい行事が予定されています。みなさんも参加してみませんか？

■半年会員 ・ 個人会員1,000円 ・ 家族会員1,500円

■会員の特典

- ・ 年間を通して博物館の常設展や企画展の観覧料が無料になります。
- ・ 友の会の楽しい行事に参加できます。
- ・ 友の会の出版物やミュージアムショップの商品を割引価格で購入できます。
- ・ 催し物案内、博物館ニュース、会報等が送付されます。

※詳しくは友の会事務局まで(電話 088-668-3636)

◆2016年度10月以降の行事予定

友の会会員だけの行事です。会員になればどの行事にも自由に参加できます。

10月15日(土) 磯や干潟の観察会(和歌山県海南市)

11月 5日(土)

中世城館めぐり
(徳島県内の城館跡)

12月11日(日)

京都日帰り研修(京都市)

2月~ 3月

土柱の見学(阿波市阿波町)

※行事名・期日・場所は変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

